

第二部 インダス文明遺跡とその同時代遺跡探訪記

第二部はインダス・プロジェクトで訪問した場所についての紀行文などを写真中心でお伝えしたい。というのも、プロジェクトでは研究成果が重要視されるために、紀行文などを発表する機会もなかった。しかし、税金を使って調査をおこなっている以上、行った先を何らかの形で紹介する必要があるではないか。また、写真など皆さんと共有し、みてもらうことも重要だろうと考えて、この第二部では紀行文と写真を掲載することにした。

プロジェクト期間中に、海外に行くことが本当に多かった。そのなかで印象に残っている出張がある。それがインダス文明と同時代の遺跡があるトルクメニスタンとイランへの出張である。とくに、トルクメニスタンはそうかんたんには入れない国なので、5年以上たった今も、行く先々で大歓迎を受けたことが良く思いだされる。イランはニュースから受ける印象では危険きわまりない国といったイメージが先行しているが、行った感じは好印象を得た。それもイランの手配をしてくださったアクバルザーデさんがいろんなアレンジをしてくださったおかげである。本当に感謝している。

また、インダス遺跡をあちこちみて歩く旅も多かった。とりわけ印象深いのは、ガンヴェリワラー遺跡への旅とタール砂漠の中の遺跡を訪問した旅だ。どちらもパキスタン国内での旅だった。前者をアレンジしてくれたのはコアメンバーのパンジャブ大学マシーさんだ。一方、後者の旅は同じくコアメンバーのハイルプルにあるシャー・アブドゥル・ラティーフ (SAL) 大学のマッラーさんだ。お二人には非常にお世話になった。感謝の意を表したい。どちらも砂漠の中を4輪駆動車で走って遺跡踏査をおこなったのだが、その踏査行が私の探検心をくすぐり、それが楽しかったのだと思う。

私は大学の探検部出身だ。今回のインダス・プロジェクトも、その探検部精神を生かしたいとつねづね考えて行動したつもりである。だから、直接は関係しないネパール・ララ湖でのコアリングにも参加したし、古環境研究グループがサウラシュトラ半島を一周する巡検にもついて行った。アメリカ地球物理学連合 (AGU) の特別セッションであるチャップマン会議にも出席し発表までおこなったが、他の分野の学会や研究調査に積極的に参加できたことは、視野を広げるという意味で本当に良かった。とくに、古環境研究グループのコアメンバーを務める前壱さんにはご迷惑をおかけした。感謝の気持ちを込めて、御礼を述べておきたい。

なお、第一部とは趣向を変え、デス・マス調ではなく、デアル調で述べていく。

トルクメニスタン紀行

2006年11月、インドからトルクメニスタン航空機に乗ってトルクメニスタンの首都アシュガバードに降りたつ。トルクメニスタンへはインダス文字研究の第一人者であるフィンランドのアスコ・パルポラさんとプロジェクトのコアメンバーであるインドのカラクワルさんといっしょに行く。トルクメニスタンに行くことになったのは、ゴヌル・デペ遺跡の発掘者であるサリアニディ教授（『シルクロードの黄金遺宝：シバルガン王墓発掘記』岩波書店刊行の著者で知られる）が受賞を記念しておこなわれた国際会議に参加するためである。しかし、私じしんは国際会議よりも、プログラムのなかに各地の遺跡見学ツアーが盛り込まれていること、とくにインダス文明の同時代遺跡であるゴヌル・デペ訪問に魅力をおぼえた。私はサリアニディ教授とも面識はないし考古学者でもない。その私がこの国際会議に出席することになったのは教授と親しいパルポラさんに誘われたからである。魅力的な遺跡ツアーを含んだ国際会議に誘ってくださったパルポラさんに、この場で感謝の意を表したい。トルクメニスタンは中央アジアの旧ソ連に属していた国である。南はイランとアフガニスタン、東と北はウズベキスタン、北の一部はカザフスタン、西はカスピ海に面し、人口500万足らず小国である。われわれが行った当時、そこは知る人ぞ知る、

ニアゾフ大統領による独裁政治がおこなわれていた。大統領の肖像が町のあちらこちらに掲げられ、ヨーロッパでは北朝鮮と並び称される国だ。ところが、石油と天然ガスの地下資源によって、経済的には北朝鮮とはくらべものにはならないほどゆたかである。首都アシュガバードには高層ビルディングが建ち並び、近代的な整然とした町並みをほこる。独裁者だったニアゾフ大統領はわれわれが帰国後すぐに亡くなったが、後継の大統領は集団指導体制の下、民主化をめざしているという。しかし、その後、この国に関する報道はほとんどない。

アシュガバード空港に降りたつとCIPルームに通される。CIPとはVIPならぬCommercially Important Person（商業的重要人物）の略語である。商業的重要人物という言い方に苦笑するが、そのあとでその意味を理解させられることになる。つまり、各地でテレビインタビューをうけ民族舞踊によって歓迎される。まさに国賓待遇並の扱いをうけたのである。このときまさきにおもいだしたのは、北朝鮮を訪問した日本の政治家たちが北朝鮮びいきになったことだ。これほどの大歓迎をうけると、人間というものはずなおい気分がいい。それだけはまちがいない。「トルクメニスタンにもう一度行きたいか」と聞かれれば「もちろん」と即答するだろう。その日がまた来るかどうかはわから

ないが・・・。

国際会議には『ことばの考古学』（青土社）などの著作で知られる、サーの称号をもつケンブリッジ大学コリン・レンフルー教授、インダス文明研究のペンシルヴァニア大学グレゴリー・ポーセル教授、インド＝ヨーロッパ語族の考古学的研究で有名なジェームス・マロリー教授といったそうそうたるメンバーが出席した。しかし、国際会議それ自体は議論の場と言うよりもサリアニディ教授の祝賀といったおもむきがつよく、ロシア語による発表に対

する英語の同時通訳はほとんど機能しないといった有様であった。しぜんと会議よりも、立派な博物館での展示物や遺跡ツアーの方に参加者の関心は寄せられていった。

ここでは、ゴヌル・デペ遺跡を紹介する。ゴヌル・デペ遺跡で驚いたことが一つあった。それはブルドーザーで発掘をおこなう点だ。ソ連時代から結構おこなわれていたらしい。あとは、写真をご覧いただきたい。





【34 頁 写真】 上左 ゴヌル・デペ遺跡風景 / 上右 ゴヌル・デペ遺跡出土のインダス印章。国立博物館に展示 / 下左 国際シンポジウム会場 / 下右 昨年亡くなったグレゴリー・ポーセル教授（左）とホーリー・ピットマン博士

【35 頁 写真】 上右 コリン・レンフルー教授（左）とジェームス・マロリー教授（右） / 上右 空港で歓迎を受けるパルポラ博士 / 下左 トルクメニスタンでの歓迎風景 / 下右 メルブ遺跡の大キズ・カラ（ササン朝ペルシャ時代の城）

イラン紀行

2007年10月、イランの遺跡を踏査するために、プロジェクト研究員の上杉さんと寺村さんといっしょにテヘランに着く。インダス・プロジェクトが対象とする紀元前三千年紀の環境変化をかんがえるためには、その周辺地域の同時代遺跡にも目を向けないと理解できないと感じていたこと、とりわけ前年にトルクメニスタンに行ったのでその思いが強くなったこと、アフガニスタンやパキスタンに隣接するイラン高原の東地域に、注目すべき遺跡が発掘されていることなどがそのおもな理由である。

しかし、イランへ行こうと思いついたのはそういった表向きの理由だけではない。その年の7月にイタリアのラヴェンナで行われた国際南アジア考古学会に参加した際に、イラン考古局のファゼリ局長にお会いしイランの遺跡を訪問するように勧められたことや、大阪大学に来ていたアクバルザーデさんが国立博物館の碑文部門のトップで、イランへ来るときにはイランでの準備はすべて任せるようにとの申し出があったことなど、個人的なコネクションがあったことも大きい。とくに、アクバルザーデさんはテヘラン空港への出迎えから見送りにいたるまで、またジーロフト遺跡やシャフリ・ソフタ遺跡の訪問許可から現地への航空券や現地での警備の手配にいたるまで、すべて面倒を見てく

ださった。この場を借りて感謝の意を表しておきたい。

トルクメニスタンと同様、イランでもまず国立博物館の見学からおこなった。国立博物館には展示館が二つある。イスラム以前の展示館とイスラム以後の展示館の二つだ。われわれが行ったときにはイスラム以後の展示館が改装工事中で見学できず、イスラム以前の展示館だけがオープンしていた。紀元前三千年紀に関心を寄せるわれわれにはちょうどよく、先史からササン朝にいたる展示品を十二分に堪能する。イラン国立博物館の展示品というとアケメネス朝以降のイラン帝国の芸術品などが多いのだろうと勝手に想像していたが、紀元前三千年紀やそれ以前の土器やアクセサリー類が結構多いのにおどろかされる。ルーブル博物館にあるハムラビ法典が楔形文字で書かれた碑文のレプリカもあったが、レプリカと思えないでさえに妙に感心する。教科書に出てくるようなペルセポリスのレリーフやルリスタンの青銅器など、昔ならったことを思い出しながら、みてあるく。また機会があれば是非再訪してみたい。それが私の率直な感想である。

アクバルザーデさんがいろいろと便宜をはかってくださり、一般展示品以外にも倉庫に眠る発掘出土品もみせてもらう。とくに、今回訪問することになっているシャフリ・ソフタ遺跡やジーロフト遺跡からの

出土品を格納した倉庫に案内される。倉庫室にはいるのは特別の許可書が必要だが、アクバルザーデさんのおかげで倉庫室に入って出土品を直接見ることができた。あらかじめ申請していないと写真撮影はできないといわれていたが、アクバルザーデさんが博物館館長に電話で許可を求めた結果、写真撮影が許された。本当にアクバルザーデさんには感謝の言葉もない。

まず、シャフリ・ソフタ遺跡の遺物をみせてもらう。こちらは土器が中心で、正直私はいま一つ関心をもてない。しかし、ジーロフト遺跡の出土品にはたいへん興味をおぼえる。とくに目をひくのはクロライトとよばれる石でできた飾り物や花瓶上の器、重りなどである。これらクロライト容器には細かい彫刻と象眼がほどこされている。彫刻のモチーフには人間や動物、とくに蛇とサソリがみられる。その美しい彫刻工芸品は美術品として売られていたら買いたくなる。そういうすばらしい品である。じじつ、このジーロフト遺跡では盗掘がおこなわれ、これらクロライト製の盗掘品がヨーロッパの骨董市場に流れるようになってから遺跡自体が知られるようになり、本格的な発掘がはじまったと聞く。10月8日にはジーロフト遺跡へと飛行機で向かう。バムの空港でわれわれを迎えてくれたのは現地の発掘関係者や通訳など5,6名の方だった。一番驚いたのは、

そのなかに小銃を持った二名の護衛をもなった軍の大佐がいたことである。再びバム空港から飛び立つまで、かれら護衛は終始われわれと行動をともにしてくださった。実際、日本でも大きく取り上げられたので覚えておられる方も多いと思うが、同じ時期にバムで拘束された日本人旅行者がいた。それを思うと、小銃を持った護衛はけっして大げさというわけではない。

まず訪問したのはバム城である。地震で壊滅的打撃を受けた、この世界遺産は中世のお城である。地震の爪痕が生々しく残るバム城はその規模といい、城塞のなかに広がる町並みといい、壊れていても壮観さは十分に伝わってくる。地震で壊されていなかったとしたらその壮観さはさぞすばらしいものだったろうに、そう思うと残念な気がする。現在、ユネスコの支援で、復興作業がおこなわれているが、復興にはかなりの時間がかかるという。

バムをあとにして、今度はジーロフト遺跡へと車で向かう。道はどこも舗装され、インドなどよりははるかに整備されている。2時間ぐらい走ったところで、ジーロフトの町に到着し、今夜はそこにある発掘関係者が利用している宿舎に泊まることになる。

ジーロフト遺跡はイラン南部の都市ジーロフトの南28 kmに位置し、北マウンドと

南マウンド、それに東側にひろがる多数の墓と西側の王墓とみられる墓地、それにまだ発掘されていない多数の小さなマウンドからなる。このうち、われわれは北と南のマウンドと王墓、および墓から掘り出された多数の出土品を集めたジーロフト博物館を訪れることができた。

まず南マウンドに案内された。南北 250 メートル、東西 300 メートル、高さ 24 メートルのマウンドには足場が組まれ、これからはじまる発掘に備えている。2007 年度の発掘で、半円形上に日干し煉瓦を敷き詰めた入り口テラスとその奥まったところに頭部がない男性像(112 センチメートル)が発見された。この像の下半身は装飾が施されており、この地域を統治した支配者だと考えられている。一方、北マウンドは階段状になっていて、メソポタミアのジグラットと同様の建物とみなされている。また、マウンドの西側で発見された墓のなかに、特別に作られた部屋に安置された埋葬品も豊富な墓がみつきり王墓とみられている。さらに、これまで知られていない文字らしきものが刻まれた石も発見されている。これらの事実から、王権の存在が指摘されている。

この遺跡の重要性は出土品からもあきらかである。出土品のなかでとりわけ目をひくのはクロライトとよばれる石でできた飾り物や花瓶上の器、重りなどである。これらクロライト容器には細かい彫刻と象眼

がほどこされている。彫刻のモチーフには人間や動物、とくに蛇とサソリがみられ、蛇やサソリは神聖なものとされたのであろう。こうしたクロライト製出土品はハリール川沿いのシャハダード遺跡やテペ・ヤヒヤ遺跡でも発見されており、この地域に共通する重要な文化要素であったことをうかがわせている。発掘を指導しているマジドザーデ博士はジーロフトを中心とするハリール川文明の可能性を指摘している。王権の存在と地域に共通する文化要素がそれを裏付けているという。

ジーロフト遺跡からシャハリ・ソフタ遺跡までは陸路で行けば 300 キロメートルほどでつく。しかし、この地域は危ないため、一度テヘランに戻り、ザヘダーンに飛ぶ。ザヘダーンから陸路シャハリ・ソフタへ向かった。

この遺跡は思ったよりもはるかに大きな遺跡だ。その広さは東西約 1,250 メートル、南北約 1,750 メートルに及ぶ。歩いて回るのは大変だ。1960 年代後半から 70 年代にイタリアの調査隊が発掘調査し、現在はイラン人考古学者の手で発掘が継続されている。その広さを考えると、なかなか発掘は終わりそうにない。私個人的には、遺跡の横にある小さな博物館にあった印章が興味深かった。また、インダス文明遺跡から大量に出てくる、三角形のテラコッタケーキも出土していて、インダス文明との関係がどんなものだった

のか、想像をふくらませると楽しくなってくる。

シャハリ・ソフタ遺跡訪問の後は、シスターンに行って、博物館を見学したり、クーイハージャと呼ばれるゾロアスター教の聖地（NHK のシルクロードに登場したことを後で知る）やダハネエ・コラマン（奴隷の口を意味する）と呼ばれる、アケメネス朝時代の遺跡を訪ねたり、いろいろと内容の濃い旅だった。

ロフトの南 28 km に位置し、北マウンドと南マウンド、それに東側にひろがる多数の墓と西側の王墓とみられる墓地、それにまだ発掘されていない多数の小さなマウンドからなる。このうち、われわれは北と南のマウンドと王墓、および墓から掘り出された多数の出土品を集めたジーロフト博物館を訪れることができた。

まず南マウンドに案内された。南北 250 メートル、東西 300 メートル、高さ 24 メートルのマウンドには足場が組み立てられ、これからはじまる発掘に備えている。2007 年度の発掘で、半円形上に日干し煉瓦を敷き詰めた入り口テラスとその奥まったところに頭部がない男性像（112 センチメートル）が発見された。この像の下半身は装飾が施されており、この地域を統治した支配者だと考えられている。一方、北マウンドは階段状になっていて、メソポタミアのジグラットと同様の建物とみなされている。また、マウンドの西側で発見さ

れた墓のなかに、特別に作られた部屋に安置された埋葬品も豊富な墓がみつきり王墓とみられている。さらに、これまで知られていない文字らしきものが刻まれた石も発見されている。これらの事実から、王権の存在が指摘されている。

この遺跡の重要性は出土品からもあきらかである。出土品のなかでとりわけ目をひくのはクロライトとよばれる石でできた飾り物や花瓶上の器、重りなどである。これらクロライト容器には細かい彫刻と象眼がほどこされている。彫刻のモチーフには人間や動物、とくに蛇とサソリがみられ、蛇やサソリは神聖なものとされたのであろう。こうしたクロライト製出土品はハリール川沿いのシャハダード遺跡やテペ・ヤヒヤ遺跡でも発見されており、この地域に共通する重要な文化要素であったことがうかがわせている。発掘を指導しているマジドザーデ博士はジーロフトを中心とするハリール川文明の可能性を指摘している。王権の存在と地域に共通する文化要素がそれを裏付けているという。

ジーロフト遺跡からシャハリ・ソフタ遺跡までは陸路で行けば 300 キロメートルほどでつく。しかし、この地域は危ないため、一度テヘランに戻り、ザヘダーンに飛ぶ。ザヘダーンから陸路シャハリ・ソフタへ向かった。

この遺跡は思ったよりもはるかに大きな遺跡だ。その広さは東西約 1,250 メートル

ル、南北約 1,750 メートルに及ぶ。歩いて回るのは大変だ。1960 年代後半から 70 年代にイタリアの調査隊が発掘調査し、現在はイラン人考古学者の手で発掘が継続されている。その広さを考えると、なかなか発掘は終わりそうにない。私個人的には、遺跡の横にある小さな博物館にあった印章が興味深かった。また、インダス文明遺跡から大量に出てくる、三角形のテラコッタケーキも出土していて、インダス文明との関係がどんなものだった

のか、想像をふくらませると楽しくなってくる。

シャハリ・ソフタ遺跡訪問の後は、シスターンに行って、博物館を見学したり、クーイハージャと呼ばれるゾロアスター教の聖地（NHK のシルクロードに登場したことを後で知る）やダハネエ・コラマン（奴隷の口を意味する）と呼ばれる、アケメネス朝時代の遺跡を訪ねたり、いろいろと内容の濃い旅だった。





【40 頁 写真】上左 地震で壊滅したバム城 / 上右 ジーロフト遺跡のジグラット / 下左 ジーロフト遺跡の南マウンド / 下右 ジーロフト遺跡出土のクロライト製容器。独特の図柄が特徴

【41 頁 写真】上左 シャハリ・ソフタ遺跡 / 上右 シャハリ・ソフタ遺跡を案内してくださったイラン考古学者と記念写真 / 中左 ゾシャフリ・ソフタ遺跡の墓地 / 中右 ソロアスター教の聖地 クーイハージャ / 下左 テヘラン / 下右 国立博物館のスタッフとの記念写真。長田の隣がアクバルザーデさん（現在は館長）

ガンヴェリワラー遺跡行

ガンヴェリワラー遺跡へ行くために、ラホールでケノイヤーさんと待ち合わせた。2007年4月のことだ。4月のラホールはすでに日本の真夏をはるかに超えた暑さだ。温度は40度を越す。このガンヴェリワラー行きには、ケノイヤーさんだけが案内人をつとめたのではない。もう一人、ラホールにあるパンジャブ大学考古学科教授のマシーさんが参加された。かれはその前年に先遣隊として、ガンヴェリワラー遺跡を訪れており、先導者としてふさわしかった。

この暑さのなか、ラホールからまっすぐガンヴェリワラー遺跡へ行くのではない。まずハラッパーへ行き、ハラッパー遺跡の発掘を手伝っているパキスタン人と測量道具などをもって、ガンヴェリワラー遺跡に向かう。まずラホールを出発し、約200キロメートルをおよそ二時間半で走り抜ける。ハラッパーまでは道もいいし、それほど疲れない。しかし、ケノイヤーさんの仕事の関係で、ハラッパー遺跡には結局二泊した。それがこの暑さになれるためによかったかどうかはわからない。ただし、ハラッパー遺跡をゆっくり眺める時間があつたので、それはうれしかった。

4月16日、ハラッパーを昼すぎに出発。南西方向に車は進んでいく。およそ200キロメートル進むとバハーワルプルに着

く。今夜はそこで泊まることになった。泊まりはサーキットハウスである。パキスタンでは政府関係者が地方を回るときに泊まるのがサーキットハウスだ。じつは、インドにも同様の宿泊所があり、名前もパキスタンと同じサーキットハウスと呼ばれている。英領時代の名残である。ホテルもないような地方の町に、都会並みの施設を持っているのがサーキットハウスで、このバハーワルプルのサーキットハウスもなかなか豪華だった。

翌朝4時に起き、バハーワルプルを出発し、一路、デラーワル・フォートに向かう。途中、ソフィア・ローレン主演の映画『ひまわり』に出てくるようなひまわり畑を通り過ぎる。そこまでは道がよかった。ところが、砂漠が近くなると、道もかなりわるくなる。家もまばらになると、突然目の前に城塞があらわれる。それがデラーワル・フォート（砦）だ。この砦はタール砂漠のインド側にある都市ジャイサルメールのマハー・ラージャが建てたものだそうで、高さ30メートルの壁がそそり立っている。城塞は半円形に飛び出した部分、稜堡が40、城塞は周囲1500メートルわたる。かなり遠くからでもよく見える。

デラーワル・フォートにはツーリストロッジがある。そこで一時間ほど休んだらうか。そこから、目的地のガンヴェリワラー遺跡に向かって、道なき道を砂漠のなか、四輪駆動車で突き進んでいく。

砂漠というと、グラニュー糖のようにサラサラとしている砂だけが広がっている。そんなイメージをいただく人も多いかもしれない。しかし、ここの砂漠は車のタイヤが沈むこともなく、砂礫の広がる荒野だ。また、茶褐色だけの世界ではなく、乾燥地にはえる肉厚でトゲのある草が結構広がっている。そういうと、ケノイヤーさんはここにもともと川が流れていたからだと説明してくれた。そう、これがサラスヴァティー川、つまりハークラー川の涸れた河床だ。たしかに、砂が少なく、土が硬く、周囲と違ってまったく草のないところが幅 10 メートル以上つづいている。川だったといわれると川にみえてくる。その両側には草が生え、砂もみえているが、これが川の土手にあたるのだろう。なかには、雨が降れば水がたまりそうな窪地もみられ、水があったことを実感させてくれる。大河といわれれば、ところどころ川幅が広く、素人目にはそんな印象も持つ。もっとも後で専門家に聞いたが、こんな規模では大河とはいわないらしい。

なるほど、これがあの「幻の川サラスヴァティー川」なのか。いろいろと文献にあたっていた場所を踏査するのは探検の醍醐味だ。67年前、老いた身を引かずって、スタインもこの場所に立ったのだ。興奮している自分を覚え、さらに興奮してくる。これこそアドレナリンが全身を駆け巡る状態なのだろう。だから、探検は止められ

ない。しかし、待てよというもう一人の自分がある。全身の水分が蒸発していくような砂漠での調査にただただうんざりする人もいるにちがいない。こういった人たちは、肉体的な苦痛ばかりを覚え未知の地に立つワクワク感がないのだから、探検は止められないという結論にはいたらないぞ。そう気がつくと、今度はべつの思いが頭をもたげてくる。そうか、だから探検家が世間から「物好きな人」としか認識されないのだ。思考はどんどん暴走していく。限界を超えて上昇していく砂漠の大気が夢魔のような思考をあおり立てているのだろう。汗はたちまちのうちに蒸発し、猛烈な暑さなのにタオルはいらない。ただ、シートに接している部分だけが、乾燥した大気に触れないために、汗でぐっしょり濡れている。体温も上がっているのか、熱にうなされたような探検をめぐる夢想が広漠とした大地に広がる。こうしたらちもない思考をしている間も、車はさらに進んでいく。

旧河道からは途中で外れ、草がところどころ茂る砂漠を進む。その砂漠のなかに、車が何台も通った跡がはっきりとわかるようについている。チョーリスターン・ジープラリーのコースだ。このラリーは毎年二月から三月にかけての時期におこなわれる。パリ・ダカールラリーでサハラ砂漠を走る車をみた人たちが計画したのだそうだ。そのコースに分断されるように、

ガンヴェリワラー遺跡があった。案の定、ケノイヤーさんはおかんむりだ。ラリーコースをこの遺跡から外すようにパキスタン政府に申し入れているのだが、なかなかコース変更をしてくれない。お怒りはごもっともだ。ラリーよりも古代遺跡での観光地開発を真剣に考えてほしい。ケノイヤーさんの熱弁には力が入っている。

ガンヴェリワラー遺跡は素人目にもそれとわかる。それはなぜか。赤い土器の破片が散乱しているからである。遺丘が二つあり、赤い土器の散乱部分はかなり広い。パッとみただけで、いろんな遺物がみつかると。このときパキスタン人の一人が銅製印章をみつけたが、これはチョーリストーンでは初めてだという。わたしも遺物を拾おうとすると、ケノイヤーさんがさかんに止める。一つにはコンテキストなしの遺物は意味がないという方針に基づく。つまり、ちゃんと測量し、それぞれの位置をグリッド上で把握したうえで、遺物がどこから出てきたものかを記録する。闇雲に集めればいいというのは現代考古学では許されないのだろう。宝物探しはすぐに止めた。

ガンヴェリワラー遺跡を歩きだしてそう時間を経ないうちに、車中とは比較にならない暑さに音をあげはじめた。宇宙の果てまでも晴れわたった空から射るような熱線が降り注いでいる。この暑さは生死の問題だ。とにかく暑い。ラホールで

もすでに40度を越していたが、この砂漠地帯では50度近かったのかもしれない。陰がないので、唯一の影となる車のなかにはいるが、シートが焼けこげるのではないかとおもうほど熱くなっている。それでも外よりはましだ。そうか、ケノイヤーさんは、この炎天下で動き回ることを注意していたのか。そう気がついたときには、かなり体調がおかしくなってくる。自称探検家の私は、このところデスクワークに追われ、いつの間にか、退役探検家になっていた。それに五十代ともなると、インドの大地を駆け回ったころとは格段に肉体が衰えてきている。あのアドレナリン効果などどこかへ行ってしまった。恐ろしいほど早い動悸だ。お酒にあまりつよくない方なので、お酒を飲んで酔っぱらったときの、あの脈打つような動悸に似ている。もうほとんどお湯に近くなった水をさかんに口に含み、熱中症を防ぐ。さいわい、大事にいたらなかったが、暑さは怖い。それを実感させた砂漠体験だった。もと探検家が現場復帰するには困難な道が待ち構えているものだ。まあ、これもまた探検の醍醐味と負け惜しみを平気でいうのだから、探検家などと自称する輩は始末に負えない。それにしても、80近い年齢で、この焼ける大地を探検したスタインはまさに探検家の中の探検家だ。こんな暑さの中、ケノイヤーさんは遺跡の測量を開始する。さすがに、手には

ミネラルウォーターのボトルを持ち、さかんに水を口に含んでいる。これがやっぱり最良の熱中症予防なのだろう。ハラッパー遺跡のコンピューター室で夜遅くまで仕事をしているかと思うと、50度近い熱風吹くガンヴェリワラー遺跡で測量にいそしむ。ケノイヤーさんのエネルギーには本当に頭が下がる。それでも、これ以上、炎天下で仕事を続けるのは無理という判断で、一時間ほどで作業は中止し、デラーワル・フォートに戻った。赤い色の土器破片に覆われた場所は、帰るときにも何度もみえた。なるほど、チョーリスターン砂漠でインダス文明遺跡

が多い訳だ。考古学者ではない気楽さからか、勝手にそう思った。つまり、赤い土器の破片がある場所をプロットしていけば、遺跡の数は当然多くなる。このことは、この後で訪れたタール砂漠での遺跡探検でも同じことだということを知る。ただそうなると、赤い土器の破片が散らばっているところはすべて遺跡なのか。その辺の判断は考古学者の手にゆだねるしかない。素人には砂漠を移動する人たちがあちらこちらでキャンプをしていた跡のようにしか見えないのだが、それはたぶん素人判断なのだろう。



【写真】
左上 ガンヴェリワラー遺跡での調査隊 / 右上 ガンヴェリワラー遺跡の概観。真ん中に道が見えるが、それがラリーのコース / 左 調査隊の記念写真

タール砂漠の遺跡探索行

2008年10月20日、いよいよタール砂漠へ向けて出発する。まず、大学のあるハイルプルから四輪駆動車二台で南に向かう。30分ほど(24キロメートル)行けば、コート=ディジーという街に着く。ここにコート=ディジー遺跡がある。この遺跡はインダス文明以前のコート=ディジー文化を代表する。このコート=ディジー遺跡はインダス文明の成立を知るうえで重要なもので、1955年、パキスタン考古学者ハーンによって発掘がおこなわれた。タール砂漠の前に、この遺跡からみていこう。

この遺跡はハイルプルから行くと、右手側の道路沿いにある。はじめてみたときはショックだった。というのも、どうみても廃墟の山としか写らないほど、荒れ放題だったからだ。これがあの有名なコート=ディジー文化の名前の由来となった遺跡なのか。愕然としたのを覚えている。インドでもパキスタンでも、インダス文明遺跡はモヘンジョ=ダロやドーラーヴィーラーといった限られた有名な遺跡を除けば、ほとんどが大事にされていない。柵で囲んで立ち入り禁止になっているところは少ない。コート=ディジーほどの有名な遺跡なのだから、もう少し手入れをしてもいいのではないか。むき出しになった地層には土器が埋まったままだし、地面には土器や腕輪のかけらが散乱し、なか

にはラピスラズリの腕輪の破片もみつかった。これがコート=ディジー遺跡の現状なのである。

このコート=ディジー遺跡と道路を隔てて反対側にコート=ディジー・フォート(砦)がある。18世紀の終わり頃に建てられた城塞は遺跡から眺めると、なかなか立派だ。高さ35メートルの丘にさらに9メートルの砦が築かれている。城塞の全長は1.8キロにもおよぶ。ところが、この城塞にはいると、また悲しい現実をみせつけられる。なかの調度品が一切なく、こちらも遺跡同様廃墟のたたずまいだ。アユーブ・ハーン大統領の時代に、なかにある調度品などが政府に没収されたのだという。没収と言うよりも略奪だったとマッラーさんが説明してくれた。

コート=ディジーでみた二つの文化遺産。時代はずいぶんとちがっていても、どちらもかつての栄華を彷彿とさせるものがほとんどなくなってしまった。城塞の外壁だけは崩されることがなく、いまでも立派な砦となっている。そのことがかえって、痛ましく覚える。

コート=ディジーからさらに南に行くと、道がどんどん悪くなる。舗装がとぎれたところは砂がむき出しになっていて、大型バスが通るたびに、われわれの四輪駆動車のフロントガラスが砂をかぶり、前がみえなくなる。途中で、ラクダの大群にも遭遇する。いよいよ、タール砂漠に突入

していく。

最初に、マッラーさんが連れて行ってくれたのはタルージービト遺跡だ。コート＝ディジーから南に行くこと二時間、かなり遠い。この遺跡に着いてまず思ったことは、この遺跡が広いことだ。マッラーさんたちの測量では20ヘクタールだというが、もっと広く感じられる。というのも、半分が砂漠のなかに、例の赤い土器が散乱し、あとの半分は草もみえる半乾燥地帯にある。ちょうどタール砂漠との境界あたりに遺跡が広がっているので広くみえるのかもしれない。あきらかに遺丘とわかる小高い丘が二つ確認できる。

この遺跡が発見された経緯について、マッラーさんがこう教えてくれた。何年生だったか記憶は定かではないが、この村の中学生だったか、高校生が授業でインダス文明、とりわけモヘンジョダロ遺跡の勉強をしたとき、そこに出てきた土器と同じようなものが村にも出ることを知り、先生に相談したところ、先生がイスラマーバードの中央政府宛に手紙を書いた。それが考古局にまわされてはじめて、この遺跡の存在が考古学者にもわかったのだそう。それが1990年代のことだ。それほど昔の話ではない。この分で行くとまだまだこうした知られざる遺跡が発見されるかもしれない。

マッラーさんはこの遺跡を日本との共同発掘をさかんに勧める。近くの政府オフィ

スで泊まることも可能だとその場所も見に行く。じつは、プロジェクトではガンヴェリワラー遺跡を発掘する予定だった。その発掘では砂漠のなかで泊まる場所は当然テント生活を余儀なくされる。治安のことを考えるとなかなかOKが出せなかった。マッラーさんはその辺の経緯をよく知っている。そこで、ガンヴェリワラー遺跡との治安面でのちがいを強調し、ここはちゃんと政府関係のオフィスに泊まれると説得にも力が入る。しかし、このときはすでにブットー元首相の暗殺があった10ヶ月後で、パキスタンの政治状況を考えるとイエスとは言いにくい。

翌日、こんどはタール砂漠のなかにある遺跡を訪問する。

前日はコート＝ディジーからまっすぐ南に下っていったが、今回は南西方向に向かう。朝早く、日の出前にハイルプルを出発。しばらく行くと、朝焼けに映えるローリー丘陵が目の前にせまる。この丘陵ははげ山で、木が一本もない。ここから取れるチャートとよばれる石は石刃につかわれ、インダス文明地域各地で見つかっている。

さらに行くと、ナーラ運河にぶつかる。ここがサラスヴァティー川の旧河道なののだとの説明をうける。この辺は運河があり、綿花栽培がさかんである。その綿花畑のなかに、最初の遺跡があった。ビール遺跡だ。ここは畑のなかにあるせいか、遺

跡だといわれてももう一つぴんと来ない。例の赤い土器の破片がほとんど見あたらない。しかし、黒い土のなかに、腕輪や石刃がみつきり、遺跡だとわかる。ここはまだ砂漠まで距離がある。ビール遺跡をあとにして、さらに砂漠へと進んでいく。タール砂漠のなか、三カ所の遺跡を訪問した。最初の二つ、ゴーブ遺跡とサラン・ワロ遺跡は完全に砂漠のなかにある。砂漠というと必ず登場する、砂のうえに波のようにみえる風紋を見つけ、まさに砂漠のまっただ中であることを実感する。この二つの遺跡はチョーリスターン砂漠の遺跡のように、赤い土器の破片が散乱した様子とはずいぶん違う。もちろん、赤い土器のかけらがみえ隠れしている。しかし、この付近はサラサラしたような砂が多く、遺跡自体が砂に埋もれている。これまでの遺跡は砂で足を取られるような場所にはなく、われわれがいなく、シルクロード沿いにある砂漠のなかの遺跡というイメージとはどこか違っていたが、このタール砂漠の遺跡はまさに砂漠のなかの遺跡とよぶにふさわしい。

最後に行ったプーンガル・バンブロ遺跡は少し遠かった。この遺跡は遠くからでもよくわかる。というのも、白い砂が目立つタール砂漠なかに、突然赤い丘が目飛び込んでくる。あれがめざす遺跡かとマッラーさんに聞くと、ああそうだと答えてくれた。なるほど、これだけはつきり

と色のちがいが出ていると、素人目にもわかる。

こうして二日間かけて、タール砂漠の遺跡を駆け足でみてきた。タール砂漠のなかを四輪駆動車で走るためには、ある程度のスピードが必要だ。つまり、ゆっくり走るとハンドルを取られて、砂にタイヤが埋まってしまうのだという。四輪駆動車の助手席で、砂漠のなかを突き進んでいると、なんとなく高揚してくる自分を感じる。そうだ。これが探検なのだ。心の中で、そう叫んでいる自分に気がつく。砂に埋まるかもしれないし、ハンドル操作を誤って崖から落ちてしまうかもしれないのに、そういう状況がうれしくてたまらない。50 すぎてもなお、こうした高揚感を覚えることに幸せを感じるとともに、プロジェクトをやってよかったとしみじみと感じさせる。そんなパキスタンの砂漠でのインダス文明遺跡探検だった。





【48 頁 写真】コート=ディジー砦の無残にもはぎ取られた装飾
【49 頁 写真】上左 コート=ディジー砦からみた遺跡。トラックが走る道路の横の小高い山がコート=ディジー遺跡 / 上右 ゴーブ遺跡で遺物の表面採集をおこなうマッラーさん。手前には風紋 / 中左 サラン・ワロ遺跡。二台の四輪駆動車で行く / 中右 タルージビト遺跡でみつけた土器破片 / 下左 ビール遺跡横の綿花畑 / 下右 プーンガル・バンプロ遺跡のマウンド